2018.03.26（月）

川崎支部便り（定期便）（2018年４月－第２号）

（オープンで各自が主役：川崎支部）　川崎支部支部長　赤津　武雄

（執筆幹事　河合･親川）（今回の執筆者は河合）

川崎支部の皆さん、お元気でしょうか。

先月の創刊号はお楽しみ頂けたでしょうか。今回は南武線についてです。気楽にお付き合い願います。

川　崎　点　描　（南武線沿線の始まり）

多摩川に沿って川崎の海側から東京都稲城市に入り、ここで多摩川を渡り立川まで、細長い川崎市の北東から北西まで背骨のように走っている鉄道が南武線です。南武線誕生の起源は、川崎市の上平間で代々名主を務める家の 16 代当主の秋元喜四郎氏が、1919 年 5 月 5 日（大正 8 年）に鉄道院へ「多摩川砂利鉄道敷設免許申請書」を出願したのが始まりでした。

川崎駅を起点に橘樹郡の各村を経て、東京府南多摩郡稲城村に達する蒸気鉄道の運営の申請でした。申請した目的は、申請書題名の通り多摩川から採取した砂利の運搬で、1920 年 1 月 29 日（大正 9 年）に免許は公布され、同年 3 月 1 日に「南武鉄道㈱」を設立しました。同年 3 月 17 日には終点となった立川迄の延長を追加申請したのです。

この追加申請は、単に砂利運搬だけでなく、多摩地域と川崎を結ぶ交流路線となることも秋元氏は目指し、主要事業の登戸・宿河原の砂利運搬のため、川崎～登戸間を「第 1 期線」としました。しかし、当時は稲田村（現登戸付近）から大師河原までの多摩川の水上交通が有り、私の父（1914 年（大正 3 年）溝ノ口生まれ）が「子供の頃は多摩川の水量も多いので、船を人夫がロープで引張り、二子はもちろん宿河原、登戸あたりまで引き上げ、砂利や他の物資を下流に搬送していたのです。二子で船を繋留しておく時は複数隻連結してあり、その舟の下を何隻息継ぎなしで泳げるかを友達と競っていた。」と聞かされました。

1925 年（大正 14 年）に二子橋が建造されてから、水量の変化（登戸には調整堤防が有ります。）がおきて、戦後の私が見ている二子多摩川の近辺の水量は、大正時代に運搬船が二子・宿河原・登戸迄引きあげられていた事は想像がつきません。その様なことを聞いた事が有りませんか。

戦後の多摩川は、東京側の二子玉川も川崎側の二子新地も料亭が有り、鮎取る投網船や屋根のついた屋形船が浮いている原風景が昭和 40 年頃まで見られました。南武線の登戸にも料亭が有り、屋形船は存在感を誇示するかの様に誇らしげでした。

(参考文献：JR ホームページ、高津区役所の各種案内パンフレット)

次回は、南武線沿線の続きをお楽しみに！

川崎支部の活動

・2018.02.17（土）には二子玉川夢キャンパス（RISE の 8 階）で赤津支部長による講演会が行われました。

・2018.03.24（土）に津田山駅脇の緑ヶ丘公園で、湘南支部役員も来られて、お花見が盛大に行われました。

・次回の講演は、2018.04.21（土）に湘南支部山田氏による「都市トンネルの火災と避難環境」です。是非来てください。お待ちしています。

耳寄り情報

南武線の車両を見るとナハ、クハ、モリ等と車両に記載しています。

① ク・・・運転台付き（正しくは制御車で、先頭車です。）
② モ・・・中間電動車（運転台は有りませんが、モーター付きの中間車両です。）
③ クモ・・・運転台とモーター付きの制御電動車です。
④ サ・・・モーターも運転台もない車両です。
⑤ ハ・・・普通車です。（自由席、指定席等）
⑥ ロ・・・グリーン車（特急の他、東海道線の通勤電車にも有ります。）
⑦ シ・・・食堂車（現在、電車でこれを持っている車両はありません）
⑧ ネ・・・寝台車（「ハ」「ロ」などの後ろに付く特殊な記号です）
⑨ ヤ・・・訓練車や職員用の電車を表します

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：k_yamagishi@6kou.co.jp 山岸宛（窓口））